NoLifePrincess

墺離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮｏＬｉｆｅＰｒｉｎｃｅｓｓ

【Ｎコード】
Ｎ２６９１Ｑ

【作者名】
墺離

【あらすじ】
不死者の王には７２人の子供たち。
６６人の王子と６人の王女。
次の冥王になれるのは一人だけ。
王子たちは互いに互いを殺しあうー・・あっという間に半分の王子が死んでしまいました。
６人の王女の中から妃を選んで王にたてるのはたった一人、一人だけ。
さて、誰が生き残る？

／そんな中、彼らの争いをみていた第五王女はこういったのです――

・「くだらない」と。

／時系列バラバラ・基本一話完結・不定期連載

リンドンヴェールの夜（前書き）

新連載始めてみました。
基本一話読みきりで、時系列バラバラな感じです。
話によっては長かったり短かったり…
お付き合いいただければ幸いです。

リンドンヴェールの夜

不死者の王には７２人の子供たち。
６６人の王子と６人の王女。

次の冥王になれるのは一人だけ。
王子たちは互いに互いを殺しあうー・・あっという間に半分の王子が死んでしまいました。

６人の王女の中から妃を選んで王に截てるのはたった一人、一人だけ。

さて、誰が生き残る？

第３章より抜粋

一・・神話集

＊

リンドンヴェールの夜の森
良い子はきちゃ駄目　攫われる
黄泉の国から蔓が延びて

絡めとられて　食べられちゃう
リンドンヴェールの夜の森
悪い子はいれるぞ　放り込むぞ
黄泉の国から迎えが来て
悪い子　首を撥ねてしまえ
リンドンヴェールの夜の森
くらいくらい夜の森

一・・リンドンヴェール童謡集第二楽三節より抜粋

＊

一人の男が暗闇の森の中を走り抜けている。
ぜー・・はー・・ぜー・・はー・・
自分の喉から出る音だけがいやに森に響いていた。
山へと続く麓の森だ、奥に進むにつれ傾斜がつき、冬の寒さと共に体力を奪っていく。

木々の隙間から見えるのは、嫌になるぐらいの満天の星空と満月の明かり。
そして森の奥、小高い丘にの上に見えるのは月明かりにうっすらとその姿を見せる古びた屋敷の青い屋根。

リンドンヴェールの町外れ、森を抜けた小高い丘の上に昔からある大きな屋敷。
かつては貴族の所有する別荘だったとか聞くが、定かではない。
いつ、誰が建てたのかなんてこの町の住人にとってはどうでもいいことだ。
今はもう人が住んでいる気配など微塵も感じさせないこの屋敷がただそこにひっそりと立っている、ただそれだけ。

男はその屋敷を目指すように足を進める。
普段人など通らない道なのか、すでに獣道と化している中を掻き分け苦労して進めば漸く丘の上、崩れた屋敷の外壁へとたどり着くことが出来た。

そこから中へ入り込むー・・町では”お化け屋敷”などと言われているこの屋敷にはどうせ誰も住んじゃいないんだ、構うものかと壁を越え屋敷の中へどうにか入れないか庭をぐるりとまわることにした。

にゃー・・

どこかで野良猫が鳴いている。
自分と同じようにこの屋敷に入り込んで巣でもつくっているのか。
庭を突きぬけ屋敷の正面へ回りこむ。

だがそこで男は目を見開くことになる。残念なことに最初の予想

は外れたようだ。

ー・・灯りだ。

誰もいない空き家なのに目に飛び込んできたのは蝋燭の明かりだった。

それも一つではない、一階のある一室が無数の灯りでともされている。

はて、おかしい。確かにここには誰も住んではいないはずなのに…ごくりと唾を飲みこんだ。

怖いもの見たさー・・好奇心という誘惑に駆られた男はよせば良いものを、そっとその明かりの漏れる部屋に近づき窓から中を覗き込んだ。

どうやらそこは屋敷の応接間のようだ。

壁の燭台に付いた蝋燭の明かりと、壁際に作られた大きな暖炉に轟々と火が灯っている。

そして、その前には揺り椅子に身を預け重圧な本を読みふけっている人影ー・・女だ。

まだ少女と言っても良いかもしれない。

暖炉の火の影になってその顔色まではわからないが、さらりとこぼれる雪のように白い髪が目を引いた。

ふと、それまで本に没頭しているようだった少女の首が動きー・・こちらを振り返った。

「!?」

目があった。たまらず窓から身を離すー・・が。

「どちら様でしょうか？」

「ひっ！？」

背中が何かにぶつかりそれ以上下がることはできなかった。

恐々として後ろを振り返れば青い髪の青年がこちらを冷たく見下ろしているではないか。

「本日の来客予定はなかったはずですが…我が屋敷に何用で？」

「おっ…俺は…」

「タオ」

目の前の青年とは違う別の声にはっとしてそちらに視線をやれば、先ほどの少女が窓を開けてこちらを見下ろしていた。

「滅多にこないお客様なのだから、そう虐めるものではないですよ」

「申し訳ございません、お嬢様」

口調は柔らかいが戒めるような少女の言葉に、青年は深々と頭を下げた。

「…怪我を？」

少女の視線が自分の足元へと落ちる。

その言葉と共に、先ほどまで薄れていた足の痛みがぶりかえしてずきずきと痛み始めた。

「どうぞおあがりなさい。傷の手当てと…暖かい紅茶はいかが？」

その蠱惑的ともいえる少女の声に誘われるように男は館の中へと足を踏み入れることとなった。

＊

されるがままに傷の手当てを受け、”タオ”と呼ばれた青年が淹れた紅茶を口に含む。

テーブルを挟んだ向かいのソファには少女が座り、自分と同じように紅茶を飲んでいる。

…いや、同じように、というのは語弊があるかもしれない。

カップ一つ手に持つ仕草でさえ、自分と比べるなどおこがましいほど洗練された動きを見せているのだ。

部屋の中には暖炉の火が爆ぜる音と、茶器がこすれる音しかしない。

ついに沈黙に耐えかねた男がやっとの思いで声を絞り出したのは、すっかり紅茶が冷めてしまった頃だ。

「た…助けて頂き何とお礼をすればいいのか…」

「礼には及びません、当然のことです」

さらりと小首をかしげて微笑む少女は美しかったー・・そう、少女はとても美しかったのだ。

暖炉の火に照らされてはっきりと見えるその肌は髪と同じように、ぬけるように白く輝いている。

紫色の瞳は長い睫毛で覆われてえもいえぬ妖艶さが漂っていた。

少女といって間違いない年頃だというのに、時折見せる仕草の中に”女”を感じさせるのだ。

あと2．3年もすれば求婚者が途切れることのない絶世の美女となるのだろう。

少女に見惚れていた男は、後ろに控える青年の視線にはっと、我に返った。

「おれ…いえ、私はリンドンヴェールの町で大工をしております、アイザックと申します」

「私(わたくし)はヴィルフォント・レティシア。これは私の従僕の”道(タオ)”」

「…失礼ですが、お二人はいつからこちらのお屋敷に？ついこないだまで空き家だったはずですが…」

この質問に答えたのは青年のほうだった。

「二日ほど前からとなります。お嬢様の遠い親類の持ち家だったのを借り受けたのです、暫くこの国に滞在する予定でしたので」

「それでは外国から？」

「えぇ、北のはずれの…」

成る程、それならば彼女たちの珍しい毛色にも納得がいく。
北には美人が多いと聞くし、タオと呼ばれた青年は顔こそ整っているものの、内陸では見かけない人種だ。
おそらくは海の向こうから渡ってきたのだろう、北は他大陸との貿易が盛んらしいから。

「長年、空き家だったためか未だ掃除が行き届いていなくて…不便なものです」

苦笑する少女に男も笑みをこぼした。

「持ち主がいらっしゃったとは思いもしませんでした。私が生まれる前から空き家だったようで、皆は”幽霊屋敷”と呼んでいる位ですからね」

「…アイザック氏、一つ宜しいですか？」

ふと、青年が口を挟んできた。

「何故、そのような幽霊屋敷にこんな夜更けにこられましたか？それも怪我までされて。差支えがなければお教えいただきたいのですが」

青年が疑念を抱くのもいたし方があるまい。
自分だってこんな夜更けに怪我をした人間が庭先に転がりこんできたら同じように警戒するだろう。

「道ー・・」

少女が咎めるように口を挟むが、男はそれに首を振る。

「お気になさらないでください、怪しいのは当然です。実は…、友人と酒を飲んで家に帰る途中で強盗に襲われまして…」

「まぁ」

恐ろしい、とレティシアは目を見開く。

「無我夢中で逃げていたらいつの間にかこの森に。夜が明けるまでは森を出るのも恐ろしくて…空き家だったこの屋敷に逃げ込もうとしたのです」

「静かなところだと聞いていたのに、物騒なこと」

「最近はどこも不況続きで、そういう輩が増える一方なんですよ」

「困ったものですね、いくら不況とはいえ他の人を襲うなどとは…道、戸締りをしっかりお願いね」

「はい、お嬢様」

怯えた様子で従僕を見上げる少女の何と可憐なことか…！

「アイザックさん」

「ー・・は、はい！」

「今日はこのままお泊りになってくださいな。外はまだ危険でし

ょう？道、部屋の用意をー・・・」

「申し訳ございません、お嬢様。生憎と客間はまだ清掃が行き届いておりません。使用人の部屋でしたら一つ空いているのですが」

「そう…困ったわね、お客様を使用人の部屋に泊めるわけにも…」

少女の言葉に男は焦ったように口を挟んだ。

「お構いなく！一晩泊めていただけるなら納屋でも構いやしませんから！」

「納屋にだなんて、そんな失礼なこと出来ませんわー・・では、アイザックさん、申し訳ないのだけれど使用人の部屋で我慢していただけるかしら？」

「そんな滅相もない！ありがとうございます！」

何と親切な少女だろう、こんな見ず知らずの他人に一宿を与えてくれるなんて。

元々ここにきたのだって一晩夜風をしのいで寝隠れできるところを求めてのことだったわけだし、願ったりもしない申し出だ。

感謝の言葉が尽きぬまま、その後すぐに男は青年の案内で部屋へと通された。

使用人用の部屋だとはいうが、男の住んでいる家よりも広い。

「…何もかもお世話になっちまいまして、本当にありがとうございます」

「いえ、全てはお嬢様のお心あってのことですから。それではアイザック氏、良い夢を」

そういって青年は部屋を後にする。

ふらふらと窓際におかれたベッドに横たわれば充分にバネの効いたマットの弾力と、真新しい布団の柔らかさが疲れた身を優しく包んでくれた。自宅の固く潰れたマットとカビ臭い布団とは比べ物にならない。

これはいい夢が見られそうだぞー・・と、男は目をつぶった。

＊

一・・リンドンヴェールの夜の森　良い子はきちゃ駄目　攫われる

満月がすっかり中天に昇りきった頃。

燭台を手に持った従僕の青年が廊下の灯りを落としていく。

それと同時に窓の戸締りがしっかりなされているか一つずつ丁寧に確認していくのだ。

すー・・っと雲がかかり空の満月が隠された。

薄闇の中、手に持つ燭台の灯りだけが青年の手先を照らしている。

ゆらり、とその火が揺れ

「？」

……

鈍い音が廊下に響く。

＊

少し甲高い、木の軋む音を立てながら扉が開かれた。
広い部屋。内装自体はシンプルだが一つ一つの調度品がさぞ名のある職人が手がけた一級品のものを使っていると一目でわかる。
奥へと進めば寝室へと繋がるもう一つの内扉。
薔薇が彫られたその扉を静かに開ければ微かに香る甘い芳香。
濃紺の寝台の上、月明かりに照らされて見えるのはあどけないながらも、男の欲をかりたてるには充分な肢体を横たわらせる少女の姿。

紫の瞳はすっかり閉じられ、長い睫毛がより一層協調されている。
その吸い付きたくなるような玉肌に魅せられ手をのばすー・・がそれは閉じていたはずの少女の眼によって妨げられた。

「…そこで、何をしているのですか、アイザックさん？」

明らかに警戒している少女の瞳に映る自分の姿が見える。

「いえ、ただお嬢さんのことが心配でね」

そこに映る自分の顔はとてもとてもー・・下卑た笑みを浮かべて

いる。

「だから少し様子を見に」

「私に触らないで」

伸ばした手がぱしりと撥ねられた。

少女は身を起こすとその瞳を忙(せわ)しなく動かす。

「道、道は何処です？」

「へへ」

従僕の名を呼び続ける少女の声に思わず笑いが零れてしまう。

「あの男だったら来やしませんぜ、お嬢さん」

「そんな筈はありません」

絶望、あぁ儚げなその顔がたまらなくぐっとくる。

「”リンドンヴェールの夜の森　良い子はきちゃ駄目　攫われる”〜」

突然の、調子っぱずれの歌声に少女が小首をかしげた。

「知らないかい？お嬢さん。この森はな、あの世と繋がってるんだぜ、あんたみたいな女は真っ先にとって喰われちまうんだ」

「道！」

男の様子に恐怖を覚えた少女が後ずさる。
何度も何度も従僕の名を呼び続ける様に男の中の嗜虐心は高まる一方だ。

「だから呼んでも無駄だっていってるだろ？もうここには俺とあんたしかいないんだ、二人で仲良くしようぜ、な？」

男の手が怯える少女の肩に触れる。そのまま無理矢理押し倒してー・・・

「……私に触れるな、といわなかったか？」

「！？」

少女の怯えていた瞳が、声が、怜悧で鋭いものへと変わった。
その急激な変化に驚いて思わずその身を離してしまう。
ぐん、と周りの気温が一気に下がった気がした。いや、気のせいかもしれない。

「道、何をしている」

「だっ、だから何度も言ってるだろう！あいつはこねぇよ！！」

ついさっきまで主導権は自分にあったはずなのに、今、この場を支配しているのは目の前の少女。
叫ぶ声が震えるー・・そんな自分を見て少女はふっと笑った。
見下した笑み、下(おれ)を蔑む笑い方だ。

「何が可笑しい！」

笑うな、俺を笑うんじゃない。お前ら金持ちに俺らの、俺の何が分かるって言うんだー・・！！

カッと頭に血が上り、手を少女に向かって振り上げる。

「申し訳ございません、お嬢様」

耳朶に聞こえるその声に、一気に頭に上った血液が下がっていく。

「少々、時間がかかってしまいました」

「そんな、まさか…」

振り下ろされようとしていた自分の腕を掴む、第三者の手。

後ろに立つ男をおそるおそる振り返る。まさか、ありえない、だってこいつは俺が…

「思ったよりも抉れていたようで」

「ひぃぃぃっ！！」

すぐ目の前にあるその顔に目をやった男は喉のそこから引き攣れた声を上げる。

青年の顔の右半分には頭から流れ出た血が半分生乾きのままべったりとこびりつき、青い髪もその大半が赤く染まっている。

形の良かった頭の一部が不自然に陥没しており、その合間からはピンクいろと茶色の混ざったような色合いの肉片と白いものが見え隠れしている。

頭に次いで顔も殴りつけたはずだ。……

なのにその傷はどこにも見当たらない。
「その上手足まで潰されるとは予想外で、動けるようになるまで時間がかかってしまいました」
「言い訳はいい、こちらへ来い、道」
「申し訳ございません」
あっさりと男の腕を離すと、青年は寝台を迂回して少女の元へと歩いていく。
あまりにも自然なー・・いや、違う。不自然な二人の主従のやり取りに男は顔を青褪めさせながら壁際まで後退した。
「なっななな何でだ!!何であんた生きてんだよ!お前ら一体何なんだ!」
既に男はパニック状態だ。
汗が噴出し、瞳は挙動不審に動いている。
だが、二人はそんな男の様子を気にかけることもない。
寝台に腰掛ける少女の目の前に青年が跪けば、少女は何のためらいもなくその頭部の傷口にー・・あろうことか接吻を落とした。
「ひっ」
その異様なまでの光景に男は喉を引きつらせる。
青年がすくり、と立ち上がる。
その顔や頭に血痕は未だに付着しているものの、既にその頭部に傷はない。

（何なんだこいつら…！！）

「こっ！この化け物！」

思わず口からついて出た言葉に、やっと目の前の主従がこちらを見た。

少女が笑う。

「化け物？いいや、違う。彼は私の魂鬼だ」

「こっ、こんき…？」

「そう、魂鬼。死した魂が主と契約を結べば魂鬼となる」

すっと、少女の白い細腕が男に向かって伸ばされた。

「このまま何事もなく夜を過ごせば静かに送ってやったというのに」

いや、と少女が首を振った。

「何事もないわけがない、か。お前がこの屋敷に来た時点でそれは、まず無い」

「何を言っているんだ！？」

訳のわからないことを並べ立てる少女に男は金切り声にも近い声を上げた。

そんな男に少女は困った奴だ、と肩を竦めた。

「まだ分からないか？お前は……いる」

「へ？」

少女の声が一部歪んで聞こえた。何といった…？

「レティシア様、まだ魂が自覚していないようです」

「そうか」

面倒だな、と少女がこぼした。

「今日、リンドンヴェールの町の外れで強盗に襲われた人間がいる」

少女は淡々と話し始めた。

「その強盗はどうしようもない人生をおくってきた男だ。幼い時から盗みや強姦、数え切れない罪を犯してきたのだから」

「何、を…」

口の中がカラカラに渇いていく。

「そして男は今日もまた罪を重ねた。金を奪うために町の男を二人、殺した」

だけどな、と更に少女は続ける。

「その男の命運も尽きたのだろう、襲い掛かった内の一人が事切

れる前に反撃にあい傷を負った、足と腹に」

「腹…？」

ちがう。俺が怪我をしたのは左足だけだ。

あいつ、くたばったかと思ったのに懐を探ってたら俺のナイフを奪って俺の足にー・・

ズキリ、と手当てをした足が痛む。

畜生、と視線を下にやれば

「え？」

どろり、と溢れるドス黒い色。

右のわき腹から絶え間なく溢れるソレを目にした瞬間、冷や汗と共に、足の痛みなんて比べ物にならない痛みが襲ってきた。

「な…んだこれ…何だよ！これ！！」

恐慌状態に陥った男が少女に掴みかかろうとするが、痛みにその足がもつれ崩れ落ちた。

「痛ぇ、痛ぇよぉ…！一体何だよ…畜生！畜生っ」

「男はそのまま森へ逃げ込み、そして力尽きた」

痛みに涙が溢れてくる。

顔だけ少女たちのほうへむければ哀れむことも驚くこともしない、少女の冷たい瞳にぶつかる。

「だが魂は否定する、”自分はまだ生きている”と。そしてお前

はここへ来た」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だうそだ！」

今度ははっきりと少女の声が聞こえた。

「お前は死んだ」

「嘘をつけぇえええ！！」

俺は生きている。でたらめなことをいうな！と男は痛む体を叱咤して体を起こすと少女に襲い掛かろうとー・・

「へ？」

足が動かない。

痛みからじゃない、違う、足に何か絡み付いている。

「レティシア様、開きました……」

「あぁ、そのようだな」

男の足元にはぽっかりと空いた黒い影が一つ。

そこから触手のようにのびたタール状の黒いモノが蔓のように男の足に巻きついていく。

「ひぃぃぃっ」

「お前が”死”を思い出したからやっと開いたようだ」

「たっ助けー・・」

足元のその影に得体の知れない恐怖を覚えた男は、少女に手を伸ばす。

だが少女は「何故？」と首を傾げる。

同じ仕草でもほんの少し前まではそれが愛らしいものだと感じていたのに、今では全く別物に感じるから不思議だ。

「それに、彼らが放すわけがない」

つ、と少女が自分の後ろを指差す。

だが、振り向くことはしなかった。出来なかった。

生暖かい無数の息遣いが耳元にかかる。

そして匂うのは腐臭。

「いっ…嫌だっ…！」

耳に聞こえてくるのは怨嗟の声。

自分が今まで手にかけてきた人たちの恨みの声。

「嫌だ嫌だ！助けてー・・！」

「彼らもそう言っていただろうにな。あぁ、そうだ最後に一つ訂正をしよう」

影が足から腹、腹から胸、首へとその触手を伸ばしてきた。

「この森は”あの世”と繋がっている一つの入り口ではあるが、生身の人間を”連れて行く”ことなどしない」

「！？」

ついに影は口元を覆い男の絶叫を掻き消した。
目を目いっぱいに見開き男が声なき声をあげる。

（何故何故何故どうして俺がこんな目に！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！誰か誰か誰か誰か――――！！）

だが男の声を聞くものなどここには誰一人として、ない。

少女は口元に人指し指を沿え、嫣然と微笑んだ。
その形のいい口元が歌を口ずさむ。

ー・・”悪い子　首を撥ねてしまえ”

影がぱっくりとそれを咀嚼（そしゃく）した。

＊

中庭に用意された白色のテーブルセットで紅茶の香りを楽しむ一人の少女。
青い髪の青年がその横で給仕をしている。

「お部屋の模様替えはお昼過ぎには終わる予定です」

「そう」

道の焼いたクッキーを口に含む。

甘さが控えめで実に私好みの味だ。これ以上のクッキーを私は知らない。

「…レティシア様、一つお聞きしても宜しいでしょうか？」

「何だ？」

主人に許しを得た道は、昨夜のことですが、と続けた。

「屋敷に上げずともあのままあの男を放置しておいても問題は無かったでしょうに」

あのまま上げいれることなく森に放置しておけば自然に消えていただろうし、あるいはあの時点で道の手によって消してしまっても良かったのだ。

何も、あんな周りくどいことをしなくてもよかったのではないか、と道が訪ねれば、彼の麗しの主人は笑みを湛えてこう応えた。

「無粋じゃないか」

「無粋…ですか？」

「あぁ」

主人は笑みをそのままに視線を手にしたクッキーから庭先のほうへと向けた。

つられて道もその視線の先を追えば、そこにいたのは子猫を抱え

た小さな女の子の姿。
女の子は笑顔で手を振っている。
にゃー・・
猫が一鳴きすれば幻のようにその姿は掻き消えた。
「…成る程」
確かに、無粋だ。
「気分がいい、今夜は一本あけるとしよう」
「畏まりました、それではデザートにはショコラを」
主人の好物の名を口にすれば彼女は満足そうに笑う。
「あぁ、実に楽しみだ」

リンドンヴェールの夜の森
屋敷に住まうは美しい主とその従者
リンドンヴェールの夜の森
次に迷うはどの魂？

人物紹介（前書き）

まだ出てきてない人たちもちらほら。
おいおい追記もしていきます。

結構ネタバレしますが、本編自体が時系列バラバラなのでこっちを読んでからのほうが読みやすいかも？

人物紹介

レティシア…

冥府の第五王女。

冥府での王位争いに嫌気がさして自らの魂鬼(こんき)を従えて現世へと居を移し、王位争いからは一歩身を引き不干渉を主張している。

今は冥府へと通じる扉の一つ、リンドンヴェールの森の屋敷にて静かに日々を暮らしている。

見た目は１６歳ほどの少女だが、人と同じ時を生きてはいないので実年齢は不明。

腰までまっすぐのびた雪のような白髪と、紫の瞳。

道(タオ)…

レティシアの魂鬼。

主であるレティシアを敬愛してやまない。思慮深く、主の意にそぐわないことは決してしないが、（レティシア自信に危険が及ぶ限りではあるが）時折その行動を諌める事もある。

青い短髪に、黒の瞳。異国風の端正な顔立ちで、２５前後の外見（既に生者ではないため年は不明）

白(ハク)…

レティシアにもっとも古くから仕えている白虎の姿をした魂鬼。

普段はレティシアの影に潜み、控えている。

時折ぶらりとどこかに散歩にでかけることもあるが、それは主の魂鬼にふさわしい魂を探しに行っているから、らしい。

アンジェラ…

冥府の第六王女。
７２人の兄弟姉妹の中で一番の末っ子。
幼すぎるためあまり王位争いに興味がないが、母親の一族が彼女を利用しようとしたり他の兄弟姉妹たちに命を狙われたりするため、幼いながらにも考えた末、唯一中立の立場を宣言しているレティシアを追い現世へとやってくる。
レティシアのことは心の底から慕っているし、他の姉たちのようにいじめないマリアンヌも大好き。
蜂蜜色の巻き毛のツインテールと緑の瞳。見た目は６歳前後の少女。

ウェイツ…
アンジェラの魂鬼。小鹿の姿をしている。
主に似て思考や仕草に幼さが残るものの、それなりの力を備えている。

マリアンヌ…
冥府の第二王女。
とぼけた言動や奇抜な行動をすることが多く、何を考えているのか分からない。
王位事態に興味はなさそうだが王位争いには様々なところで暗躍しているよう。
決して仲が良いとはいえない姉妹たちの中でもレティシアとアンジェラを特に可愛がり（兄弟たちは論外だ）二人がそろって現世にいってしまったことに三日三晩嘆いた挙句、可愛い妹たちを愛でるためにレティシアの屋敷へと押しかけてきた。
双子で、兄に第三王子のミリアンをもつ。
白金の巻髪に、金の瞳。”妖艶”を現したような豊満な肢体で見た目は２５前後。

狼(ロウ)…
マリアンヌの魂鬼。
美しい黒い毛並みのオオカミの姿をしている。
情報収集が得意で、マリアンヌの命でよく屋敷を空けては各所を飛び回る。
すごく良い声をしている。

メル…
マリアンヌの魂鬼。
２２，３歳ほどの女性の姿をしている。主同様、気の抜けたような喋り方をしており、いつも灰色のメイド服を着ていて屋敷では道とともに3姉妹の身の回りの世話を焼いている。
栗色のくせっ毛に、同じく栗色の瞳。愛嬌ある顔立ち。

ミリアン…
冥府の第三王子。マリアンヌの双子の兄。
数多くの兄弟の中でも上位の力を持ち、また頭もキレる。現段階で王位にもっとも近い王子といわれている。
温厚な性格で紳士的な面持ち。
肩ほどまである白金の髪と、金の瞳。２５歳前後の外見。

ディムロス…
冥府の第１８王子。
別名「狂王子」とも呼ばれており、その力はミリアンにも劣らない。
王位には興味がなさそうだが、率先して他の王子たちを殺して周っているようで、王位簒奪開戦時には三分の一の王子を亡き者にしたことで皆から恐れられている。
”殺し”以外で彼が唯一執心しているのはどうやらレティシアのようで…

黒髪に銀の瞳。２０歳前後の外見。

無関心組曲（前書き）

前回とは全くといっていいほどのノリですのでご注意を。

３姉妹のある日のティータイム。

無関心組曲

不死者の王には７２人の子供たち。
６６人の王子と６人の王女。

次の王になれるのはただ一人。
さて、誰が生き残る？

＊

レティシアはカップをテーブルの上に戻すと顔を上げて、前に座る自分よりも幼い少女へと視線をやった。

「アン、アンジェラ。口（くち）、付いているぞ」

「ほぇ？」

アップルパイを口いっぱいに頬張りながらきょとんとした顔を見せる妹にしょうがないな、とレティシアはハンカチでその口元を拭ってやる。
アンジェラは照れたように子供特有のぷっくりとした頬を赤く染める。

「ありがとう、レティお姉さま」

「いいなぁ～。ねぇレティ、私も～」

「…マリアンヌ姉様には必要無いでしょう」

二人の間に座る女性が身を乗り出してくるが、レティシアはそれを軽くあしらった。

「あぁん、レティが今日も冷たい～！でもそこがまたいい～！」

なにやら勝手に一人悶えている姉にレティシアは冷たい視線しか送る事が出来なかった。

そんな仲睦ましい（？）姉妹の様子を見守るのは側で給仕として控えるレティシアの魂鬼（こんき）の道（タオ）とマリアンヌの魂鬼のメルだ。

「あらまぁ、お楽しそうですわね」

「主にマリアンヌ様が、だとは思いますが」

道の目からは主人（レティシア）が心のそこから楽しんでいるようには見えない。むしろマリアンヌのテンションについていけていけない、といった風体でくつろぐ、というよりは疲れていっているようにも見える。

この茶会だって発端はマリアンヌだ。

「折角姉妹三人同じ屋敷に住んでいるんだからたまにはお茶会しましょうよー！！」

と、騒ぎー・・いや言い出したのは今朝のこと。

レティシアが冥界の喧騒から離れたくてこちらに居を移して3年の月日が経つが、アンジェラに続いてマリアンヌがこの屋敷に押しかけて来てからというもの静かな日というのは三日ともたない。

「マリアンヌ様はいつもお元気ですね」

「えぇ、だってマリアンヌ様ですもの」

うふふ、と意味深な笑顔でメルは笑う。

「そういえば、今日はまだ狼(ロウ)さんの姿をお見かけしていませんね、出かけられているのですか？」

いつもメルと一緒にいるはずの、黒い狼(オオカミ)の姿をした魂鬼の姿が見えない。

「えぇ、今日は少し冥界のほうに」

彼は主の命でよくこの屋敷を空ける。

玉座を狙う争いから身を引いて中立の立場を貫いているレティシアや、幼い故に命を狙われやすく、そのためここに身を預けているアンジェラとは違い、マリアンヌは今でも玉座争いに一枚噛んでいる。

他の兄弟姉妹に比べれば玉座に対する執着心はないものの、彼女は彼女なりの”野心”があるようで、こうして自分の魂鬼を冥界に向かわせては情報収集に走っているのだ。

「夜には戻ると思いますわ」

「では今晩は兎のソテーにしましょう」

「まぁ！彼も喜びますわ」

我々魂鬼はモノを食べなくても問題はないのだが、生きていた頃の習慣として”嗜好品”的な意味合いでなら食べ物を口に含むことがある。
ちなみに兎のソテーは狼(かれ)の大好物だ。

「タオ、タオ」

くいくい、と袖を引かれそちらを見ればいつの間に具現化したのか、アンジェラの魂鬼である小鹿の姿をしたウェイツがいた。
主と同様、魂鬼としても幼い彼の言葉は少し舌っ足らずだがそれが外見と妙にマッチしていてまた愛らしくもある。

「どうしました、ウェイツ」

「あれ、とめなくていいの？」

彼の言葉にほんの少し間意識をはずしていた主たちが座るテーブルへと目をやりー・・道は彼にしては珍しくほんの少し慌てた。

「レティシア様！」

いつの間にかレティシアの顔はマリアンヌの豊満なバストにずっぽりと埋まっていた。

「んふ～レティちゃんだ～いすき～」

「っ！？っ！！」

「マリアンヌお姉さま！レティお姉さまがちっそくしてしまいま

す！」

「あら～ん？ごめんね～アン～貴女もだ～いすきよ～ん」

「きゃっ」

レティシアの体を抱きしめていた両手のうち片方をはずすと、こんどはアンジェラまでもその腕の中にぎゅっと閉じ込め始める始末。

少しばかり解放されたレティシアは（相変わらず腕の中だったが）顔をあげ空気を求めた。

「むっ…胸で死ぬかと…」

「だーいじょうぶよ～レティちゃんもー、揉めばもっと大きくな」

「大きなお世話ですし、そういう話ではないです！お姉様！あれほどお酒は駄目だといっているのにいつの間に…っ！！」

道はマリアンヌの座っていた椅子の足元を見やるー・・本当に、いつの間に持ち込んでその上、いつの間に飲んでいたのか。主人のワイン蔵から持ち出されたと思われる空き瓶が数本転がっていた。

…今度からもう少しワイン蔵の管理は厳重にすることにしよう。

「だって～レティちゃんのもってるワインみ～んなおいしいんだも～ん」

「お姉様はお酒が弱いくせに限度を知らなさすぎるのです！ー・・道！メル！」

「はいは～い、さーマリアンヌ様、少し落ち着きましょうね～」

「いや～ん、もっとぎゅってする～」

「これ以上はご勘弁ください、マリアンヌ様」

メルがマリアンヌを後ろから羽交い絞めにし、腕の力が少し緩んだところで道が二人を抱き上げて救出する。

「レティシア様、アンジェラ様、ご無事ですか？」

「きゃ～！高～い！」

「……」

道の腕の中ではしゃぐアンジェラとは相反して、レティシアはその身をぐったりさせている。

「…道、部屋に戻る」

「はい、レティシア様」

アンジェラを彼女の魂鬼に託し、少しばかりよろよろとした足取りで屋敷の中へと戻る主人の後に続く。

「いや～ん待って～レティちゃ～ん」

「マリアンヌお姉さま、おうじょうぎわが悪いですわ」

「あきらめましょうね～」

…などという声を背後に受けながら道は思った。
自分としては主人（レティシア）にこそ玉座がふさわしいと心のそこから願ってやまないのだが、こういう日々も悪くないのかもしれない。

「どうした、道。随分と楽しそうじゃないか」

「そう見えますでしょうか？」

「あぁ」

そう頷く主人の後姿も心なしかー・・あぁ、やめておこう。うっかり口にしようものなら途端、我が主はへそを曲げかねない。

とにもかくにも、今日も何事もない良い一日だった、ということにしておこうか。

無関心組曲（後書き）

ちなみにマリアンヌは第二王女、レティシアは第五王女で、アンジェラが第六王女です。
全員母親はちがいます。

我が愛しの王女様（前書き）

道のお話。
少し長め。

我が愛しの王女様

それは私がまだ生きていた頃の話。
主に出会う前の話だ。

＊

私が生まれ育ったのは、その大地の半分を草原に覆われた西の大陸。
そこを国土とし、大小様々な部族からなる遊牧民のとある豪族の長子として私はこの世に生を受けた。
遊牧民、とはいっても今ではほとんどどこの部族も地に根を下ろしてはそこに集落や、町をつくって定住しているのが現状だった。
曾祖父母の時代には、遊牧民らしく季節が変わるごとに部族の営地を行ったりきたりしていたそうだが、やがてその手にとるのが家畜を追い立てる鞭ではなく剣に変われば時代はあっという間にその様を変えていった。
戦がおこれば必然と強者が残っていく。
私は幸運にもその強者の家に生まれることができたのだ。

＊

「道様、道様！どこにおられます！！」

自分を呼ぶ声に剣を振る腕を止めた。

屋敷の裏手で素振りをしていた自分の姿を見つけた年嵩の下男が息を切らして近づいてくる。

「あぁ、よかった！いらした！」

「どうした、何かあったか？」

「へぇ、東坡（トウバ）様がお呼びでございます」

「叔父貴が？」

父の弟である東坡は、体の弱い父に代わり一族を取り纏める長だ。何の呼び出しかー・・なんてすぐにわかってしまって思わず溜息を洩らしてしまった。

「たっ道様！」

「わかっているさ、梁（ヤン）。叔父貴の呼び出しに溜息など誰かに見られでもしたら一大事だとでも言うんだろ？」

茶化すようにいってみれば梁は「やめてくだせぇ、道様」と肩を落とした。

「わしは道様のことが心配でしょうがないんですよ。道様に何かあったんじゃ、亡くなられた奥方様にも、慶谷（ケイコク）様にも申し訳がたたない」

両親に長く仕え、自分が生まれたときからずっと側にいた梁は昔よりも多く刻まれた皺まみれの顔をさらにくしゃくしゃに歪ませる。

「心配するな、梁。私なら平気さ、叔父貴も私の剣の腕だけは買ってくださっている」

さて、叔父貴の機嫌を損ねかねないうちに母屋にいかなければ――上半身に浮かんだ汗を軽く拭うと、脱いでいた上掛けをさっと身に纏う。

ここいらの部族の間では世襲制が多い。

だが時として父・慶谷のように生まれつき体が弱く、騎馬部族の長として跡を継ぐには到底ふさわしくない場合などに限っては兄弟の中から代わりを務めるものが出てくる。

それが父のすぐ下の弟である東坡であり、そして彼は何よりもその地位に固執していた。

だからこそ父の長子である私の存在を何よりも厭っている。

叔父貴の部屋へ赴き、彼の許可を経て中へと入れば射るような目線が私を出迎えた。

私はそんな視線に本日二度目となる溜息を心の中で盛大につきつつ、おとなしく叔父貴の声を聞くことに徹する。

＊

「父上」

母屋から離れた西の離れに父の居室はある。

叔父貴からの呼び出しの後、私の足は自然とここへとむかっていたのだ。

寝巻きのまま庭にある池の鯉に餌をまいていた父は、私の呼びかけに振り返るとその柔和な顔を綻ばせた。

「やぁ、道」

あの叔父貴と本当に血が繋がっているのかと言うぐらい穏やかな顔をしている父、その肌は病的に青白く頬は痩せこけている。

「父上、起きていらして大丈夫なのですか？」

「あぁ、今日は気分がいいんだ。そうだ、夢でね、白い虎をみたよ」

「白い虎…ですか？」

古来より色が白い獣は神の使いなどといわれているが、夢見での”白”というのはあまりいいものではない。病的な暗示があり、またそれが虎のように大きい獣であるというなら容態の急変、体力低下、というあまり誉められた夢見ではないー・・はっきりいって凶兆だ。

「あぁ、実に美しかった」

だが父にとってはそんなことはどうでもいいのか、気にもしていない様子でその夢を思い出しては微笑を浮かべている。

病に伏せる父がそんな夢を見るだなんて洒落にもならないが、余計なことを言って水を差すのも悪い気がして「私も見てみたいです

ね」とだけ返した。

「…東坡は何といっていた？」

梁辺りにも伝え聞いたのか―・・叔父貴に呼び出されたことは既に父の耳に入っていたようだ。

「東へ行けと」

「東…次は鎌鵬（レンホウ）の地を取り込む気か」

父は戦を心底嫌っている。剣を手に取る生活よりも放牧生活に心底憧れを抱いているのをしっている。

きっと父は生まれる時代を間違えてしまったのだ、と私は思う。

もう少し早く生まれてきていれば、こんな幽閉まがいの生活などせず草原でのびのびと暮らしていただろうに。

「道、お前には苦労を掛ける」

「何を仰いますか、父上。私には剣（これ）しかありませんから」

私を忌み嫌いながらも生かされているのは私が叔父貴にとって”役に立つ”存在だから。

私がここから離れられないのは、亡き母の墓標と、臥せる父を守るため。

―・・そのために父は生かされ続けている。

「明（メイ）が私の元を去ってから、私の生きがいはお前だけなのだよ。だが私はお前の枷にしかならない―・・親としては不甲斐無いばか

りだ。私ならいつでも明の元へと行ける用意はできている」

「気弱なことを仰いますな、父上」

最近、より一層父の体が小さく見えるのは気のせいだろうか。

父は悲しげにその柳眉を潜める。

「お前はまだ若いのだからもっと自分のための生を生きなければいけないよ」

「私の剣は父上あってこその剣です。私からこれを取り上げてしまったら後は何も残りませんよ、父上」

そういって私は父の部屋を後にした。

私は上手く笑えていただろうか・・・？

＊

その夜、私は父の言っていた白い虎の夢を見た。

つい眠れなくて酒を片手に縁側にいた筈だが、いつの間にか眠ってしまっていたのだろう。

庭先の竹林から姿を現した白い虎、それが喋ったのだ、夢でなくて何としよう。

「小僧、死臭がするな」

くぐもった声で虎がそう告げる。

「出立前だというのに…嫌なことを言ってくれる」
やはり凶兆の夢、か。
空いた盃に酒を注ぎ、ぐいと虎へと突き出してみせる。
「飲むか？」
「随分と落ち着いているな、小僧。驚かぬか」
そういいながらも虎は近づいてくると差し出した盃に口を落とした。
「どちらに？喋る虎にか？それとも死を予言されたことにか？―・・どうでもいい、所詮は夢だ」
「夢？…あぁそうだな、確かに夢だ」
虎が笑った。
獣の表情など到底分かりもしないが確かに、笑った、のだと感じた。
「この世は皆、まやかしよ。何が真実で何が嘘かなど些細な絵空事でしかない」
達観しきった虎の物言いに私も笑った。
「まやかし、か。ならそのまやかしの中で生きる私は実に滑稽な生き物だ」

その背に手を伸ばしその毛並みを梳く。夢だというのに手に伝わる質感はまるで現実のようだ。
虎が顔をあげ、じっとその両目でこちらを見上げてくる。
「一・・実に澄んだ瞳をしているな、小僧。思わぬ拾い物をした気分だ」
「何だ、それは」
だが虎は私の質問に答えることなく、その身を起こすとやってきた竹林へと方向を変えた。
「馳走になった。また近いうちに会おうぞ、小僧。次は我が…と共に」
「何？」
聞き取れなかった言葉に聞き返すも、霞のごとく虎の姿は消えている。
やはり夢だったか、と首を振るもその瞳は地面に置かれたままの空になった盃に落とされたままだった。

＊

その少女に最初に出会ったのは血の臭いと、土ぼこりが漂う、野営地でのことだった。
東の豪族の一つである鎌鵬との戦を開始して三日目。

互いの戦力は五分五分、多少こちらに戦況が傾いているものの早々に決着が付くはずもなく、陣を張った天幕では連れてきた女奴隷や近くの村から呼び集めた女を集めては男衆の血気を高めるために夜毎宴が繰り返される。
その中に少女はいた。

容姿が目立つわけでもない、まだ幼いといってもいい普通の村娘。
周囲もそんな少女を気にも留めることなく、宴の席で酒を次いで周る少女の存在は空気にも等しかった。
だが何故だろう、何故こんなにも目を惹かれるものがあるのか。
自分に稚児趣味など断じてない。だというのに気付くとその少女の姿が目に入っていた。

宴中一度だけ目が合う。上座にいた自分と目があったことで少女は驚きさっと目をそらしてしまったが、その目があった瞬間胸に湧いてきたざわりとした不思議な感情。
情欲とも違う、恋愛感情とも違うー・・だが決して不快ではない・・それに私は戸惑うばかりだ。
疲れてしまっているのだろうか、と早々に宴を辞した私は自分の天幕へと戻り一晩得体の知れないこの感情に悩まされ続けた。

そして次にその少女にあったのは戦場でのことだった。

何度目の闘いだっただろうか。
馬を駆り、馬上から剣を振るう。
豊かな草原だった場所は血濡れ、死体が転がり、土煙が待っている。

あちらこちらで雄たけびや怒号が響く中、その少女はいた。

何故こんなところに！？そう思い少女の方へ駆け様とするが敵兵の攻撃がそれを阻む。

「早く逃げろ！」

せめても、と声を張り上げるが少女は動かない。

こちらに気付いていないのか…いやそうではない、少女の目は確かに私を見ている。

「何をしている！逃げろといっているのが聞こえないのか！」

私の怒声に―・・少女は笑った。

「！？」

馬鹿にしているようでも、見下しているようでもない―・・父と同じ、ただただ穏やかに笑う少女の笑みはこの場において実に異質だった。

改めて少女の存在自体が”おかしい”と思った私は何としても少女の元へとたどり着きたかったが、目の前の敵をなぎ倒した瞬間、少女の姿は忽然と消えていたのだ。

そして三度、少女に見(まみ)えた時。

私はその生を終えようとしていた。

＊

戦はその後三日三晩続き、そして私たちの勝利と相成った。
敵陣の長の首を討ち取ったという手柄を得た私はその夜の宴の席の後、寝床を襲われた。

気をつけてはいたつもりだったが連日の疲れと、わずかばかりの油断が生んだ結果でもある。

私を襲ったのは同陣営にいた叔父貴の長子だった。
―・・そう、私は味方に殺されようとしている。

腹に剣を突き刺され床に這い蹲る私に、従弟は普段から私に持っていたという不平不満をぶちまけた。
何かと叔父貴に呼び出されては戦で手柄を上げている自分が気に入らなかったようだ―・・従弟の目にはそれが自身よりも叔父貴に可愛がられていると映ったようだ。
馬鹿だな、俺は誰よりも叔父貴に疎まれていたというのに。

言いたいだけ言って従弟は出て行く。
そしてその後に残ったのは従弟の部下―・・いや、こいつはみたことがある、叔父貴の私兵だ―・・が口を開いた。

―・・慶谷様が亡くなられました、と。

私は目玉こぼれるんじゃないばかりに目を見開き、そして腹の痛みなど気にもならないぐらいに笑った。実に乾いた笑いではあったが。

成る程、さも従弟が私の手柄をねたんでの行動のようにも思えたが実際、裏で焚き付けたのは叔父貴自身だったか。
父亡き今、私を縛るものは既にない―・・そう判断した叔父貴は

早々に手を打ったわけだ。

「私は用済みか…」

元より私に野心などはないというのに―・・誰よりも臆病な叔父貴らしいといえば、らしい。

そんな私を哀れんでいるのか、一人残った叔父貴の私兵は顔を曇らせ再び剣を手にとった。

「あぁ…頼む」

「御免」

喉元に振り下ろされる刃を目が追う。

その刀身にあの少女が映った気がした―・・・やはり、あの少女は私自身が生み出した幻覚だったのか。

喉が熱い、呼吸が出来なくなる、視界が薄れ、そして

「勝手に幻覚にしてもらっては困るな」

「!?」

耳朶を打つ甘い響きに身を起こした。

…身を起こした?

「傷が…ない…?」

腹に、喉に手をやるがその何処にも血は愚か傷の痕跡も見当たらない。

「ほほぅ小僧、魂に傷を残さぬとは見上げた根性じゃないか」

「お前…！？」

聞き覚えのある声に顔を向ければいつぞやの白い虎がこちらをニタリと笑ってみていた。

「さすがは我が見込んだだけのことはある―・・姫様、如何ですかな？」

まだ誰かいるのか？

そうだ、最初に耳に届いた声はこの虎のしゃがれた声ではなかった筈だ。

「悪くはない」

虎の横に少女が現れる。

そう、あの少女だ。

だが、どうしたことだろう。確かに私が見たあの少女と同じだと言い切れるのに、その外見は全く異なったものだった。

何処にでもいる村娘だったはずだ―・・なのに虎の側で笑う少女は、顔立ちすら違う。

この大陸の人種とは異なる顔かたちは一度見たら忘れられないほど美しく、腰まである雪のように白い髪と、紫水晶を埋め込んでいるかのような瞳、華奢な体を包むのは海を越えた別大陸から来る行商人が持ってきていたドレスというものに似ている。私がみたドレスよりも丈は短く、膝から下の細く白い足がむき出しとなっているが目の前の少女によく似合っている。

「白(ハク)の寄り道もたまには役に立つ」

「たまには、は余計ですぞ、姫様」

「お前たちは…一体何なんだ…それに私は…」

これは夢の続きなのか？と問う私に少女は笑った。

「いいや、違う。これは夢ではないし、お前は死んだ」

少女の穏やかな声に事実がすとんと心に落ちてくる。

「そうか、私は死んだのか」

「そう、そしてここからがお前の始まりでもある」

「始まり…？」

少女の不可思議な言動に首を傾げれば、少女がすぐ間の前までやってきてその手を差し出した。

「お前が今まで生きていた世界は夢現の絵空事」

その声は歌うように私の耳に響く。

「私の手をとれば今まで以上の絵空事を見せてやろう」

差し出された白い指先に視線を落とす―・・・あぁ、そうか

「とるもとらぬもお前の自由。とらずにこのまま”終わらせる”

か、それとも私と共に”始める”か、好きなほうを選べ」

「私はー・・」

そっとその場に跪きその手を恭しく手に取った。

あの時から、初めてこの少女を見たときから私の胸に宿ったこの感情。

これは畏怖。

目の前の少女に対する、畏怖ー・・そして深い深い憧憬。

「貴女に捧げましょう、私の魂を」

口から自然と出てきたのはその言葉。

私の魂が心のそこから求めるのは目の前の少女。

私の魂は少女に捕らわれた―・・それは愛情でもなく、恋情でもない。それ以上の何か。

私の言葉に少女は満足げに頷く。

「道、私の魂鬼」

そして私は、レティシア様の魂鬼となった。

我が愛しの王女様（後書き）

近いうちに人物紹介作ります。

対となるもの（前書き）

短めです。
レティの元を訪れる直前のお話。マリアンヌ視点。

対となるもの

「やはり行くのかい？」

後ろから掛けられた言葉に私はふふん、と笑った。

「勿論よ。うらやましい？」

だが彼は首を竦めるばかりだ。

「彼女は怒ると思うけど」

「でしょうね。でも最後には絶対折れてくれるわ、だってあの子優しいもの」

「レティシアに同情するよ」

心のそこから彼女を哀れむ彼の声に私は再度「うらやましいでしょ」といった。

「そうだね」

おや、と以外にも素直に頷いた彼に軽く目を見開く。

「出来ることなら側にいて守ってやりたいけれど、彼女はそれを許さないだろう？」

「そうね、あの子ってばツンデレちゃんなのよ～。ん？でもどっちかっていうとクーデレかしらん？」

少し前にあちらへ渡ってしまった最愛の妹の姿を思い浮かべる。

「あんなに貴方のこと大好きなのにね」

「彼女のそれは家族愛だよ」

「そうかしら」

”家族”としての定義が薄い私たちにとってはあまりそういうのは関係ない気がする。

いずれにしろ王になるには、王女の誰かを伴侶にしなければいけないのだから。

「でもあの子を他の兄弟たちにやる気はないんでしょ？」

「彼女の気持ち次第だよ。本人が望んでいるなら僕に口を出す権利はない」

「お互い素直じゃないって言うか…むしろ貴方の場合は腹黒いって言ったほうがいいのかしら」

「やだな、そんなことはないよ」

レティシアを狙う兄弟たちがいると知れば真っ先に潰しにかかるくせに―・・にこにこと笑みを絶やさない目の前のこの男が一番危ない気がする。

「可愛そうな私のレティちゃん」

まぁ他の兄弟に可愛い妹を持っていかれるよりはまだ目の前のコイツのほうがマシだが…まぁその前に私が手出しはさせないけどね？

「アンジェラにも宜しくいっておいてくれ」

「あの子も貴方のこと好きだもんねー。全くどこがいいのやら…どうせ同じ顔をしてるんなら絶対私のほうがいいのに」

「どこからそんな自信が出てくるのか僕は不思議だな」

「失礼ね、負けないわよ」

「そもそも君は女性なんだから根本的に無理じゃないか」

「あら、私は自由恋愛なの！むしろ可愛い妹たちは別よ！べ～つ！」

べっと舌をだす。

「大人気ないな」

「貴方にいわれたくないわ～」

これ以上話していてもきりがないと、私は背を向ける。

「じゃね、まぁ貴方もぼちぼち立ち回ることね～ん」

ひらひらと手を振れば後ろでくすりと笑う声がした。

「レティシアたちの宜しく頼むよ」

「言われなくても、そのつもり。あっ遊びになんかこないでよ～？私と可愛い妹たちのらぶらぶな時間だけは邪魔しないで頂戴」

「レティシアから招かれない限りは行かないつもりだよ」

さも招かれる自信があるかのような言い方だ。嫌味な奴。

あれが自分の片割れだ何て…私たちを双子に生んだお母様を恨むわ。

私は”門”をくぐって愛しの妹たちの元へと先へ急いだ―・・早いところこのささくれだった心を彼女たちで癒してもらわなきゃ気がすまないわ。

対となるもの（後書き）

マリアンヌがでてくると絶対シリアスじゃなくなる罠。
片割れの名前はまた次回。

ふさわしき者

私がこの世で最も敬愛してやまない方。
だけどこれは決して恋などという甘い感情ではない。

＊

「レティちゃ～ん、折角こちらに来たのだし～お姉様（わたくし）温泉に行きたいわ～」

と2番目の姉が提案したのは昨夜のこと。
それからあれよあれよという間に（半ば強引）に私たちは屋敷から連れ出され、今はリンドンヴェールの屋敷から山三つほど離れた場所にある人間たちの避暑地へと来ていた。

「や～んv凄いわ～ん」

立ち並ぶ宿の数々、行き違う人の数の多さに姉は目をきらきらと輝かせている。
姉の行動力には敬服すべきところもあるが、もう少し落ち着きを持って貰いたいと切実に願ってやまない。

「…マリアンヌお姉様、もう少しで着きますからそうやって身を乗り出すのはやめてください」

馬車の窓から子供のように上半身を外に出して騒ぐ姉に注意すれば「レティちゃんのケチ～」という声が返ってきた。

「いいじゃない～少しぐらい～」

「ならばせめてもう少し姿を変えてください。私たちの容姿はこちらでは目立つのです」

この辺りの住人は茶褐色の髪色が多いー・・マリアンヌは足元まで輝く白金色の髪が波打つように美しい巻き毛だし、アンジェラは薄桃色のフワフワとした髪をかわいらしいリボンで纏めている。私にいたっては更に珍しい白髪。

ただでさえ目立つ容姿にその配色、その上、御者台には道とメルが従者として乗っているのだからさっきから道行く湯治客の視線が突き刺さってしょうがない。

目立つことを避けたいレティシアは、屋敷を出る際にも姿を変えていこうと提案したのに、マリアンヌに止められてしまい結局もとの姿のままだ。

しょうがないからつばの広い帽子とベールで隠しているが、マリアンヌはそれすらも拒んだ。

「レティシアお姉さま、これ以上マリアンヌお姉さまに何をいってもむだですわ。マリアンヌお姉さまは一度決めたらてこでも動きませんもの」

二人のやりとりを馬車の端で見ていたアンジェラが呆れたように

溜息を洩らす。

「そうよ～、レティちゃん諦めは肝心って言うでしょ？」

「そういうことではないのです」

どうしてこうも騒がしいのか。

アンジェラに引き続いてマリアンヌが屋敷に押しかけてきてからというものの騒がしくない日など二日と置いてないかもしれない。

これではまだあちらにいたときのほうがマシだったかもしれない。

あの頃は姉様（マリアンヌ）の来襲は月に多くても3度ほどだった。

その変わりといっては何だが二日に一度は兄弟たちのくだらない争いに何かしら巻き込まれはしたが…いや、やはり今の状況よりはまだあれらの相手をしていたほうがマシだった。

後悔先に立たずとはよく言ったものだ。

やがて馬車はこれから一週間ほど逗留する屋敷へと到着した。

避暑地の最奥にある人気の少ない、だが景色だけは十二分に良い湖のほとりにある白亜の屋敷だ。

どこぞの王族が別荘として建てた屋敷だったそうだが今は上流階級向けの貸し出し別荘となっているとのことだ。

「きゃ～素敵です～！こないだ読んだ絵物語にでてきたお屋敷みたいです～！」

「本当ね～。実家に比べたら小さいけど結構綺麗なところじゃな～い。アン～、お姉さまと一緒にお屋敷の中を探索するわよ～ん」

「はい！」

馬車を降り立った途端屋敷の中へとはしゃぎながら入っていく二人の後姿を見送りつつ、レティシアは一人別の方向へと足を向ける。

「レティシア様？」

「少し散歩してくる。後は任せたぞ、道」

このまま二人の後を追えばここまで来たと同じようにマリエンヌに拘束され、アンジェラに懇願され…着いた早々疲労困憊するのは目に見えているのだ。せめてほんの少しの間だけでもいい、一人だけの静かな時間が欲しい。

私の切実な願いを汲み取ったのか、道は「お気をつけて」と一言だけいうにとどめた。

気付かれないうちに、と意識が早っていたのか少しばかり足早に私はその場を後にする。

屋敷の裏手にある湖のほとりを時計回りに進むことにした。

整備された遊歩道をあるきながらそよりと吹く風を肌で感じる。

周りには誰もいない。聞こえるのは風に揺れる木々の葉のこすれる音と、わずかばかりに聞こえる波の音。

あぁ、静かだ。

何と心地がいいのだろう、実に素晴らしい。これこそ私が求めていた静寂。

ガラにもなく感動してしまった。胸いっぱいに空気を吸い込み深呼吸をする。

「レティシア」

油断しているつもりはなかった。だが久方ぶりに得た満足感にやはり気持ちは緩んでしまっていたのだろう。

すぐ側の木陰から姿を現した人物の気配に全くといって気付くことが出来なかったし、その人の姿を目にした瞬間、間抜けにもぽかんと口を半開きにして立ち尽くしてしまったのだから。

「久しぶりだね、レティシア」

太陽の光を受けてキラキラと輝く髪は白金、肩ほどまであるそれは絹のように滑らかに揺れている。

白い肌に細身の体、それは決して貧弱などというわけではなくしっかり引き締まった体躯を見せ付けている。

優しげに微笑むその顔立ちも記憶の中のそれと全く相違ない。今となっては似た顔を毎日のように見ているのだが…やはり彼女のモノとは受ける印象が違う。

そしてその中でも特に目をひきつけられるのが黄金の瞳。

「ミリアン、お兄様…？」

マリアンヌ姉様の双子の兄、ミリアンお兄様。

前にお会いしたのはいつのことだったろうか。

私が幼い頃は良く遊んでいただいたものだったが、王位争いが本格化してきた頃からは滅多な用事がない限りは極力、お兄様に会いに行かないよう努めた。

冥府の第三王子としてお生まれになったミリアンお兄様は次期冥王に最も近い方と言われていて、とてもお忙しい方なのだ。

王にふさわしいのはミリアンお兄様。そのお兄様の邪魔をしてはいけないのだから。

「しばらく見ない間にまた美しくなったね、僕の可愛い妹姫」

彼は微笑みながら私の手をとり口付けた。

「何故…？」

今も沢山の兄弟たちとの抗争でお忙しいはずのお兄様が何故このような場所にいるのか？と小首を傾げれば、彼は苦笑しながら言った。

「少しこの近くで用があってね。そしたらどうだい？懐かしい気配がしたから辿ってくれば君がいた」

「そう、だったのですか」

「驚かせてしまったようだね」

すまない、と私の頬を撫でながるお兄様の指の温かさがとても懐かしい。

「そのようなー・・いえ、確かに驚きました。まさかこんな所でお会いできるなんて思っても見なかったものですから」

「僕もだよ、レティシア」

「このようなところで立ち話もあれですね。まだお時間はありま

すか？少し言ったところに屋敷を借りております、お茶でもいかがですか？」

「ありがとう、レティシア。ではお言葉に甘えるとしよう」

屋敷への道を促せば、彼が背を向けるー・・そして

「っ！？レティし…？」

彼の背中につき立てたのは私の両手に納まった短剣。

深く深く根元までぐいっと押し込めば、そこからあふれ出すのは鮮やかな赤色。

「なぜ…だ…？」

驚愕に染まる顔でこちらを見てくる彼から数歩距離をとる。勿論短剣を抜き取るのは忘れないし、その返り血を浴びるのも真っ平ごめんだ。

「何故、だと？」

彼の言葉にくっと笑いを噛み締める。

「それを私に聞くのか、愚かな」

「レティ」

「私の名前を馴れ馴れしく呼ばないでいただきたい」

縋るように伸ばされた手を斬りつける。

「あ”ぁっ！！」

痛みに悶え、苦しみ、そして乱れた髪の間からこちらを睨む形相に最早ミリアンお兄様の面影はない。

その様子に私は「おや」と笑みを深くする。

「ご自慢のお顔が崩れておいでですよ、ミノレラ兄様？」

「お前っ！？気付いて！？」

仮面が剥がれるようにその顔が、色彩が変わる。

濃紺の髪、灰色の瞳、ミリアンお兄様には似ても似つかない容姿。

「相変わらず猿真似がお好きなようですね、実に趣味が悪い」

「っ」

嘲笑えば羞恥と憤怒によってその顔が赤黒く染まった。

あぁその姿、何とも滑稽。

「ミリアンお兄様の姿で私を誑かし亡き者にでもするおつもりでしたか？それとも傀儡にでもしたかったのでしょうか？まぁどちらでも宜しいですが」

短剣にこびりついた血を振り払う。

「私に手を出したのがそもそもの間違いだったー・・白（ハク）」

「！？」

足元の影から白(ハク)が飛び出すとその喉元に勢いよく喰らい付きそのまま噛み千切る。
バランスを失った体が崩れ落ち、首はそのすぐ側に転がりその顔がニタリと口元を吊り上げ笑った。

「…人形か」

根暗なのも相変わらずのようだ。本当に趣味が悪い。

『くくく』

声帯を失っても尚、その口元からは声が洩れる。だがどこか遠くから響いて聞こえてくるように不明瞭だ。

「大事なお人形が壊れたというのに、随分とご気分が宜しいようですね？」

『くく、人形一体で済むなら安いもの、目的は既になされた。やはり私の思ったとおりだったな』

「…とは？」

『最初から狙いはミリアンだ。お前を狙えば奴は必ず出てくる、最初はお前を捕らえてからとも思ってはいたがー・・思ったよりも早く現れてくれたようだ』

「お兄様が？」

訝しむ私に気分を良くしたのかミノレラは饒舌に語り始める。

『今頃あやつは我が術中よ。私の結界の中で命尽き果てるのも時間の問題ではない』

酔いしれるようにミノレラの笑い声が響く。

『ははっ私こそが王にふさわしい！どうだレティシア、私と手をとらぬか？』

囁かれる甘言。

ああ、ああ、実に、

『あれについていても得なことなど何一つはない。私と共に来るというのなら存分に可愛がって、』

「ミノレラ」

実に一・・耳障り。

「”馬鹿も休み休み言え”という人間の言葉をご存知か？」

『何？』

「貴方が王？冗談も過ぎれば笑えもしない。あぁ、こういう場合”井の中の蛙、大海を知らず”とも言うのだったか？なぁ、白」

『いわせておけば一・・っ』

羞恥と怒りで声が染まる。それと共に首から伝わってくるドロリとした黒い気が私の肌を撫ぜる。実に不快だ、と蔑(さげす)んだ目で首を見

下ろす。

「そもそも、姿さえ見せない矮小な小者につくほど私は愚かではないのですよ」

右手に短剣を握り、首の上にかざした。

『レティシア！その言葉口にしなければ良かったと後で後悔してもっ』

「どうぞ、ご自由に」

手を離せば重力にしたがって短剣がその眉間に突き刺さった。

次いで柄に片足を乗せ、ぐっとそれを踏み込んだ。途端、人形の頭がざらりと塵になって消えていく。

「それに、もう二度と会うこともない」

辺りからミノレラの気配が消える。肌に纏わり付いていた不快な気もすでに無い。

もう用は済んだ、とその場から身を翻せば足元に白が擦り寄ってきた。

「姫様、宜しいので？」

「構わぬ。それにあの程度の輩にミリアンお兄様が遅れをとろう筈もない」

もしかしたら既に勝負は付いているかもしれないな、といえば白は「それもそうかもしれませんなぁ」と喉を鳴らして笑い、影へと

その身を沈める。

折角の散歩が台無しにされてしまった…気分直しに道の淹れた紅茶が飲みたい。

さぁ、さっさと戻るとしようか。

＊

―・・玉座争いなど心底どうでもいい。兄弟たちの抗争などくだらないと吐き捨てる。

だからこそ私は不干渉、無関心の立場を貫く。

―・・だが王に相応しいのはミリアンお兄様以外に有り得ないと思っている。

だからこそ私はミリアンお兄様の邪魔だけはしない。

ー・・だからといってその手助けを進んですることもない。だってお兄様はそれを望まれないから。

だけれどもしも私がお兄様の障害になりえるなら、私は私を消してしまえるだろう。

この気持ちは決して甘い恋心でも、淡い恋心でもない。
私の『誇り』、それこそがミリアンお兄様。

ふさわしき者（後書き）

レティシアはブラコンって話。

狂気の王子―1

久方ぶりに一人で静かな夕食をとった気がする。
アンジェラは久方ぶりに冥界(あちら)に用があって出掛けているし、マリアンヌ姉様は珍しく自室のある離れに篭もっている。
アンジェラの魂鬼のウェイツを信用していないわけではないが、あれはまだ経験が浅い…そのため日々激化している冥府での争いに巻き込まれてはいけないとアンジェラの護衛として道を同行させたので給仕はメルにお願いした。
食後の紅茶もゆっくりと味わうことができた、後は部屋で本でも読んでいようかと足取り軽く自室へ戻る。

本館の二階にある自室へと入ればひやりとした冷気が出迎えた。
冷気の元をたどれば視界の端でゆらりと風に吹かれたカーテンが膨らんでいる。

「閉め忘れていたか？」

夕食へ向う間には閉めていったと思ったが…自分にしては無用心極まりないことだ。
いくら姉妹がともに暮らしているからといって安心しきっていいものではない。
ここへ移り住んで数年…その間特に何事も無く過ごしてはいたが、いつどこで彼らの争いに巻き込まれるかもわからないのだから。
わずかに開いたテラスへと続くガラス扉に手を伸ばしそれを閉めようとして―・・動きが止まった。

ガラスの向こう側。薄闇に見えるその気味の悪い、笑んだ、瞳。

「っ！？」

急いで閉めて無駄だとわかってはいたが鍵をかけた。

「白っ！！」

「ここに」

足元の影の中から姿を現す忠実な私の魂鬼。だが、

『遅い遅い』

それを嘲笑うしゃがれた声が部屋のどこからか響く。

「何者だ！」

『どぉこに目ん玉つけてんだよ～仔猫ちゃんが』

私を守るように立ちはだかっていた白の体が横から飛んできた何かに叩きつけられ、その巨体を床に転がした。次いで見えない何かが上から降ってきたかと思えばその体をそこに縫いとめた。

「白っ！？」

「姫…逃げ」

『少し黙れよ』

「ー・・っ!!」

白の顔を踏みつけ口を無理やり閉ざさせたのは鳥と猿をごっちゃにしたような獣ー・・魂鬼だ。

濁った黄色い瞳がニタニタと細められ、ケタケタと耳障りな笑い声をあげる。

「……」

それと睨み合いながら反対の壁際まで下がった私は、壁に飾ってあった剣を手に取った。

『ひゃはっ!それで闘うってか王女様!お~怖い怖い』

「黙れ。どの兄弟の魂鬼か知らぬが私に牙を向いたこと後悔させてくれる」

そういって切っ先を相手にむけるが、内心舌打をしたい気持ちでいっぱいだ。

この魂鬼、ふざけた外見や言動と違って中々に手強い。白がああも容易く死角を取られるとはー・・道をアンに同行させたのは痛手だった。

『おいおい、どうした王女様。ぶるって声も出ないか?口先だけなんて言うなよ~?』

「黙れと言った筈だ。耳障りだ、その舌から切り捨ててくれる」

タンー・・と床を蹴り前に踏み込む。

剣先が宙を切る。

『ひゃっ！ひゃひゃっ！あたんねぇぜ王女様！おぉっと、けけっ今のは惜しかったなぁ』

腹立たしいことにひらりひらりと身をかわされてしまう…だが、それでいい。

「桜（さくら）！玉（ぎょく）！」

『ぎゃっ！？』

影の中から魚の姿をした魂鬼が二匹飛び出し馬鹿笑いを続けていたそいつの顔面に体当たりした。

視界を塞ぎ僅かにそいつが体勢を崩したその瞬間を見計らって、私は扉へと走った。

ここは闘うには狭すぎる。

もっと広いところ、外か、あるいは大広間。そのどちらかにさえ場所を移せばまだ何とでもしようがある。それに道を呼び戻すために使い魔だって飛ばさなければ。

少々癪だが離れのマリアンヌ姉様に助力をいただくのも―・・・と思考がそこで中断させられる。

扉に手をかけた瞬間、私の腹部に、激痛。

浮遊感を感じたのは一瞬のことで、すぐに背中に走った痛みに投げ飛ばされ壁に叩きつけられたのだと理解した。

「かっ…―・・は…っ？」

全身に痛み、痛い、くそ、何だこれは。

容赦もない殺気が圧力（プレッシャー）となって私の心臓を押しつぶさんばかりに重くのしかかってくる。

「姫様っ！！」

動けぬ白の悲鳴にも近い声がする。

応えようにも口から漏れるのはひゅー、ひゅーという肺からの息だけ。苦しい、息が、呼吸ができ…

クラクラする視界。その中で、ジャリとそこいらに散らばった破片を踏みつける足音がする。

「いけない子だ、レティ。折角会いにきたのに」

聞こえてきたその声に一気に意識が覚醒した。ありがたくないことにいやな予感ほどあたる、とはよく言ったものだ。やはり先ほどのあの影は…

「逃げようとするなんて酷いじゃないか、なぁレティ？」

壁に半ば埋もれるように崩れ落ちた私を覗き込むように傍らに跪いたのは一人の男。

私はそれを睨み付けた。動かぬ体が厭わしい、視線だけで殺せるならば今すぐに殺してやりたい。

「ディムロス…っ」

「おや、レティ。”お兄様”とは呼んでくれないの？寂しいな…ミリアンのことはそう呼ぶのに」

笑った顔のままディムロスは私の頬を打った。

「っ」

「ごめんねレティ、痛かっただろ？」

慈しむ様に私の両頬にその手を添えて優しく撫ぜてくる。ぞわりと嫌悪で全身が粟立った。

「でもお前が悪いんだよ？俺に冷たい態度をとるから…まぁお前のそういうとこも好きだけど」

段々とその顔が近づいてくる。背けようにも両頬を挟む手はそっと添えられているように見える見た目に反して強固で微動だにすることさえ許さない。

鼻先が触れ合う。

「レティ、俺のレティ」

「…あなたのものになった覚えはない」

「いいや、そうさ」

するりと頬に添えられていた両の手がゆっくりと下降していく。顔の線を撫でその手に平が首元へと滑り落ち―・・・白く細い首をきゅっ、と締め上げた。

「っぁ―・・・！？」

「お前は俺のもの。俺の伴侶となるんだよレティ、あぁいい顔だ。気高いお前の美しい顔が苦しみよがるその顔が大好きなんだ。うん、いい、すごくそそる」

うっとりと語るディムロスに嫌悪感以上のものを覚える。

「こ…のっ…変…たっ……ぐぅっ」

「はは、レティは口が悪いなぁ」

更に力を込められ、ついに私は意識を手放してしまった。

気絶したレティシアの首から手を離すと、支えを失った華奢な体はディムロスの胸へと倒れこんだ。

その体を抱きかかえると彼は至極満足そうに笑う。

「さぁ、いこうか。俺のレティ」

狂気の王子－1（後書き）

長くなりそうなので分割します。

狂気の王子ー2

「んっ…」

目が覚めてまず目に飛び込んできたのは白のシーツ。
ゆっくりと身を起こしてあたりを見渡すが周りは薄闇に覆われている。

意識を手放す前の出来事を思い返し奥歯を噛み締める。
肌に伝わる周りの空気とは違う冷やりとした感触に視線を落とせば、ご丁寧にも両手足に枷がつけられていた。

（ディムロスめ）

ひどく悪態をつきたい気分だった。
地上に居を移してからというもの、いつかあれが目の前に姿を現すのではないかと身構えていなかったわけではなかった。兄弟たちの中でもあのしつこさは群を抜いている。
今まで姿を現さなかったことにわずかばかりに慢心していたのかもしれない。いずれにしろ今回のことは自身の失態だと猛省した。

（あれが関わると何時もろくなことにならない）

大人しく捕まっているつもりなどさらさらない私は、髪飾りに仕込んであった小刀を手に取ると枷を外しにかかった。

ディムロス―・・”狂王子”
18番目の兄王子の彼は兄弟や冥府の者たちから畏怖と侮蔑を込めてそう呼ばれる。

数ある兄弟の中でもその実力は抜きん出ており、王位争いが始まると同時に率先して他の兄弟たちを殺して周った男だ。
ただの頭の狂った殺戮快楽者ー・・それだけならどれほど良かっただろうか。

彼は第三王子であるミリアンに負けじ劣らず頭もよく、策略に長け、そして強い。
どれだけその性格が破綻していても王候補の筆頭に上げられるほどの実力、それは私も認めざる終えない。

思えばそんな彼に目をつけられてしまっているのが私の不運というべきことだろうか。

初めて会ったときからー・・あぁ思い出しただけで虫唾が走るー・・何かと絡んでくる。
何度死にそうになったことか…ミリアンお兄様たちが助けてくれなければきっと私はきっと生きてはいまい。あの顔を見るだけで顔が引き攣るようになった、苦手な、いや天敵といってもいい存在だ。

誰が好き好んで人の苦しむ様を見て興奮を覚える変態などに好意を寄せるというのか。

カチャー・・手枷が音を立ててシーツに滑り落ちた。これで手足を戒めていた４つの鍵がすべて解かれた。
すっかり跡がついてしまったところ摩りながら、自由になった両足を動かしてもう一度自分のいる場所を再確認しようとして…周囲に響き渡る拍手に動きを止めた。

「だいぶ上手になったじゃないか、レティ。昔より半分もかからなかったね」

響く拍手と声は四方の薄闇から聞こえるばかりで相手が何処にいるのかは定かではない。
身構えれば体全体の筋肉が必要以上に萎縮し、知らずうちに手の平が湿っていく。

「姿を見せろ、ディムロス」

「おぉ、怖い。しかし殺気立つお前は何よりも美しいよ、レティ」

次いで聞こえてきた声は、思っていたよりもすぐ側ー・・耳元で囁かれた。

「っ！！」

ぞわりと総毛立ち、反射的に手にした小刀を背後へと振りかざす。
だが呆気なくも小刀は宙を飛び、乾いた音を立てて薄闇の中へ消えていった。
そして振り返り際には確かにそこにいたはずのディムロスの姿は私の視界から消え、何処に行ったのかと気配をたどる前に背後から伸びた手に私は顔からベッドに沈み込んだ。

「まだまだ」

「っ、離せっ！」

「駄目、レティは我儘だから少しお仕置きしてあげないと、ね？」

片手で頭を、膝で肩を後ろから押さえつけられ身動きがとれない。
その束縛から逃れようと唯一自由な腕を動かそうとすれば、残っ

た手が両腕を捕らえ後ろでひねり上げられる。容赦のないその力の入れようにぎゅっと歯を食いしばる。

「どうしたの？痛いなら声を上げればいいのに、本当にいじらしいねレティ」

誰が出してやるものか、この男の前で悲鳴を上げるなど益々こいつを喜ばさせるような真似できるはずも進んでするつもりもない。更に食いしばる歯に力を込める。が、

「ひっ」

腕の痛みが突然なくなったかと思えば、突如として耳に伝わったぬるっとした生暖かい感触に思わず口から声が漏れ出てしまった。耳朶を甘噛みしたその口だゆっくりと味わうように首筋へと降りていく。時折、歯をたてては強く噛み後をつけては反応を楽しんでいるようだ。

「いい香りだ…なぁレティ、ドレスは何色がいい？血の様な真っ赤なドレスか？それとも冥府に相応しい漆黒、あぁ、お前の髪に合わせて純白もいい…どれも映えそうだ。いっそのこと全部着せてしまおうか」

うっとりと話すディムロスを肩越しに睨み付ける。

「何度言えばわかる、私はあなたの花嫁にはならない！」

「何度言わせればわかる？お前は俺の花嫁だ」

ふっ、と背中の重みがなくなった。ディムロスが身をおこし体を

離すのを横目で見ながら素早くその下から抜け出すと距離をとった。
「本当にいけない子だ、レティ。それともそんなに俺に”お仕置き”されたいのか？」
「誰がー・・っ」
くつくつと笑いながらディムロスは腕を組んだ。
「レティ、可愛い可愛い俺のレティ。昔懐かしい”遊び”をしよう」
「？」
「よくやっただろう？」
ほら、とディムロスは両手を大きく広げた。
すると彼の足元から大きな”影”が広がる。
「！？」
瞬きの間に”影”は辺りに広がりつくし、四方を支配していた薄闇でさえ飲み込んでしまう。そしてあたりは真の”黒”に塗りつぶされ何も見えなくなった。
『”鬼ごっこ”だ、レティ』
闇の中に響く声。
その声はどこまでも優しく、そして狂気を滲ませた響きを持つ。

『5分時間をあげよう、そしたらゲーム開始だ』

パチンと指を鳴らす音が響けば、今度は私の足元を始点に”影”が去っていく。

やがて闇が消え、あたりは色を取り戻した。

だが目の前に広がるのは先ほどまでとは違う場所ー・・前後左右、何処までも続く煉瓦の塀が取り囲む巨大な”迷路”。

『無事にゴールまで辿りつければお前の勝ち。今夜はそのまま帰してあげよう』

でも、と憎たらしい声は続く。

『”鬼(おれたち)”に捕まったらお前の負け。たっぷりと”お仕置き”をしてあげる』

ガチャン、と頭上から歯車が回り始めた音がした。上を見上げれば天井の見えない闇、そこから吊るされた巨大な砂時計。

砂はもう落ち始めている。

『さぁ、上手に逃げきってご覧?』

私は走り出した。

狂気の王子ー3

（実によく、作り主の性格が現われた迷路）

砂が落ちきって半刻ばかり、出口（ゴール）を求めて迷路の中を彷徨えば嫌でもわかる。

つまりは捻くれている、ということ。

今更ながら歪んだ性格の持ち主であるということを改めて痛感させられる。

何度目かの罠と何度目かの”鬼”たちからの攻撃を交わした私は、いったいいつまでこんな茶番劇に付き合わされなければいけないのかと深く深くため息をついた。

そうしている間にも目の前の行き止まりの壁からぐにゅりと音を立てて現われる”鬼”。

「悪趣味だ」

輪廻の輪にのれず死した後もなお未練を残し、冥府の吹き溜まりでその身を腐らせ這いずりまわる魂の慣れの果てを”幽鬼（グール）”と呼ぶ。

その腐った魂にもはや意思はなく、ただ腐臭と死肉を纏い当て所なくさまよい続ける死者―・・それが私を追う”鬼”だ。

この”鬼ごっこ”のためだけにどこからか集めてきたらしい幽鬼は倒しても倒してもキリがない。

―・・果たしてこの”鬼ごっこ”に終わりはあるのだろうか？

（いや…きっとゴールはない）

なにせ相手はあのイかれた狂王子。

手駒である魂鬼を従えていない私一人ではディムロスの前では赤子同然。認めたくはないが、残念なことに力の差は歴然としている。

ディムロスは言った「”遊び”をしよう」と。

それは実に一方的なもので、彼にとっての遊びに過ぎない。彼が楽しむ、そのためだけの”遊び”。

ディムロスの作り出したこの”場”で私が捕まえられない訳がない。

アレは私の走りまわるさまを見て楽しんでいるのだ。

延々とありもしないゴールを探してさまよう私を、手駒も武器もなく幽鬼に囲まれ反撃する私を見て笑っているのだ。

それなら私がとるべき行動は一つ、ただただアレが飽きてしまわぬように逃げ続けるのみだ。

飽きてしまえば最後、ルールも何も無視してアレは私を捕らえるだろう。

私はこの”遊び”を少しでも長続きさせなければいけない。

幸いなことに白との縁はまだ繋がっている、彼はその存在を消されることなくあの場に残っていることだろう。

騒ぎに気づいたマリアンヌ姉様あたりがここを嗅ぎつけてくるはずだ。あれからしばらく時間がたっているからそろそろここの”場”を特定している頃かもしれない。

ミリアンお兄様の片割れである姉様も実力者には違いない―・・・

きっと後から色々と姉様の欲求を満たすようなことを要求されるのだろうが、背に腹は変えられない――姉様や道（タオ）がいればディムロスとも互角に闘える。

（…昔はよくミリアンお兄様に助けられたものだ）

ふと、幼い頃の思い出が脳裏に過ぎる。

まだ力の使い方もままならない私は、一度ディムロスによって”暗闇”の中へ閉じ込められてしまったことがある。

外へでる”綻び”を見つけることもできず、ただ一人、辺りを覆い尽くす闇に怯えていればその暗闇の中から伸びた白い手と、優しい声、

――おいで、レティシア

「お兄様…」

思わず口から溢れてしまった己の声に首をふる。

後継者争いが日々激化するこのさなか、あの人の手が私にのばされることはない、いや、私はそれを求めてはいけない。

私の”剣”が来るまで耐えればいい。耐え切れるだけの心は持ち合わせているつもりだ。

鬼の腕をかいくぐり、彼らを撒こうときた道をひた走る。

走ろうと、した。

「気に入らないな」

「！？」

耳にかかる声と、左肩に走る激痛。
そのまま迷路の壁へと叩きつけられた。

「っっっ」

「気に入らないよ、レティ」

私を追ってこようとしていた幽鬼（グール）たちが目の前に現れた己の主の気配に怯え、その体を縮こませているのが見えた。
顔を上げれば、目の前に酷薄な笑を浮かべたディムロスの姿。

「俺と遊んでいるのにあいつのことを考えてるだなんて、何ていけない子なんだろうね」

「何の…ことだか」

「”お兄様”って、ミリアンのことを呼んだだろう？」

どうやらあの小さな一言がこの男の琴線に触れたらしい。笑ってはいるがその身からは苛立ちが感じられる。
まずい。まだ私の手に”剣”はない。

「ふっ、私はただ”お兄様”としかいっていない。そう呼ばれたがっていたのはあなたじゃなかったか？」

「とぼけちゃって憎らしい子だね…もう少しお前の逃げる姿を見ていたかったけど何か萎えちゃった、鬼ごっこはもうおしまい」

「では次は”隠れんぼ”でもして遊びましょうか、ディムロス”

お兄様”？」

つぅ、と額に汗が流れる。

私の焦りが伝わるのかディムロスはその笑みを深めると、楽しそうに近づいてきて私の首を掴んだ。

「いいや、もっと楽しいことをしよう」

「うっ」

「レティがどれだけ泣きわめいても、懇願してもやめてあげない。もう俺のことしか考えられないようにしてあげる」

「ふざけ…っ！ぁっ！」

「大丈夫、少しはお仕置きで痛くするけど怖くはないよ、すぐによくなるから」

何がだ、と叫びたかったが器官が締め上げられ掠れた声しか出ない。

またここで意識をとばしてしまうわけないはいかない、その腕に爪を立て足を蹴り上げ抵抗を試みるがびくともしない。

近づく顔から少しでも遠ざかろうと顔をそむける。

「もう逃がさないから」

まさに死刑宣告にも近いその一言を耳にした瞬間だ、首元の拘束が突如開放された。

「はっ…はっぁ…ぁ…？」

むせ返りながらも何が起こったのかと視線を動かす。

「レティシア様！」

よろめいた私の体を支えたのは道の手だ。

「っ、遅い」

「申し訳ございません」

右奥では白（ハク）と、マリアンヌ姉様の魂鬼の狼（ロウ）が幽鬼たちを屠（ほふ）り尽くしている。

そしていつの間にか私から離れた場所に立つディムロスを挟むように立つのはマリアンヌ姉様と、

「ミリアンお兄様…？」

まさか、と驚きに目を見開く私とは対照的に、双子に挟まれたディムロスは顔を歪ませ、舌打ちをした。

「お前たちは呼んでない」

「こぉんな胸糞悪いところ呼ばれたってお断りよ、この変態」

べーっと舌を出してマリアンヌ姉様が悪態をつけば、ミリアンお兄様は微笑みながらそれに同意するように頷いた。

「そうだね、ここは空気が悪い。あの子は返してもらうよ、ディムロス」

「相変わらずいけ好かないツラをしているな、ミリアン」

「そういう君も変わらない、しつこい男は嫌われるよ？」

微笑みを絶やさぬままのミリアンお兄様はディムロスの側へと寄ると何事かをつぶやいた。

何を言ったのかはよく聞き取れなかったがどうやらディムロスを挑発するような一言だったらしい。

あからさまに嫌そうな顔をしたディムロスが、鼻で笑い飛ばした。

「はっ！自分がそうだとでも？」

「君よりはね」

「目障りな正確も変わらず、か。今すぐ殺してやりたいな、ミリアン」

「やるかい？」

しばらく至近距離で睨みあう二人の気迫にレティシアは心臓が掴まれたような錯覚を覚える。

（何という重圧感…）

さすが後継者候補筆頭に挙げられるだけのことはある。

ただ人ならばこの場にいるだけで死に至るに違いない。

だがその無言のせめぎあいを終わらせたのは、以外にもディムロスの方だった。

「…あぁつまらない、こんな状態でやったって何も面白くない」

そう言って彼は踵を返す。

その姿を歪ませ外へと移動する前に、彼は最後に私の方を一瞥すると「また来るよ、レティ」と言い残して去っていった。

願わくばもう二度とその姿をみせないでほしいものだ。

それよりも…

「災難だったね、レティシア」

先程までの重圧感など微塵も感じさせない様で、ミリアンお兄様が私の前に立つ。

そっとその白い指先が私の首元を撫でた。

「いえ、油断していたのは私でしたので」

「痣になってしまっているね、もう少し早く来れればよかったんだけど、気づかなくてすまない。痛くはない？」

「はい、大丈夫です。あの、何故お兄様がここに…？」

マリアンヌ姉様が連絡したのだろうかと視線を投げれば「違うわよ～」と首を振られた。

「僕の名を呼ぶ君の声が聞こえた気がしたんだ。嫌な予感がしてね、君には嫌がられるかもしれないが、いてもたってもいられなくなってこちらに来てしまったんだが…迷惑だったろうか？」

「そんな！迷惑だなどと！そんなことありえません、お兄様！」

そんなことは天地がひっくり返ってもありえない。

私が全力を持って否定すればお兄様は「そう、良かった」と柔和な笑で応えてくれた。

「それを言うなら私の方が…ご多忙なお兄様のお手を煩わせるようなことをしてしまい、誠に申し訳ご―・・っ」

だが、下げようとしていた頭と謝罪の言葉は、私の唇にかかったお兄様の指先によって止められてしまった。

「しっ、それ以上言うなら僕はレティシアを叱らねばならないよ」

「お兄様…」

「僕がいつ迷惑などといったかな？レティシア、君はもっと甘えるべきだ。僕たちは他の兄弟たちとは違う、確かな絆でつながっている。君は僕たちにとって”特別”な存在だ、僕は君にもそう思ってもらってると自惚れていたんだけど…違った？」

そっと私の頭をお兄様の腕が包み込む。私よりも背が高いためちょうどその胸元に私の頭が抱きかかえられている、温かいお兄様の体温を、心音をすぐそばで感じる。

「いいえ、いいえ違いません、ミリアンお兄様。私にとってもお兄様は特別な方です」

お兄様の手が私の頭を撫でている。幼子をあやすようなその仕草に少しばかりの羞恥心が湧き上がってくるが、久方振りのお兄様の

優しい抱擁だに私は身を委ねることにした。
…だが、それも長くは続かない。
「ずるーい！私だってレティちゃんを助けに来たのにー！！ミリアンばっかりずーるーいーわーん！！」
しばらく傍観を決め込んでいたマリアンヌ姉様が、ついに我慢しきれなくなったのか横から突進してきたのだ。
「こら、マリアンヌ危ないじゃないか」
「私もぎゅーってするのー！離れなさいよミリアン！」
「お姉様っ！苦しいです！」
「おやめくださいマリアンヌ様！レティシア様が窒息します！」
胸に押しつぶされそうになりながらもなんとか態勢立て直す。
お兄様の腕から引き剥がされ、背後から姉様のあつい抱擁を受けてはいるが私の手をそっとお兄様が握ってくれた。
片割れの様子に苦笑しながらお兄様が言う。
「ねぇ、レティシア。久しぶりに君のいれた紅茶が飲みたいな」
私はそれに満面の笑みをもって応えた。
「はい、お兄様。喜んで」
さぁ、屋敷に帰ろう。

狂気の王子ー3（後書き）

思ったよりも長くなってしまいました。というかお待たせしました。

お兄様がディムロスに何を言ったのかはまたべつのお話で。

幼姫のゆううつ（前書き）

短め。

幼姫のゆううつ

こんにちわ、小鳥さん。いいお天気ね。

あなたもお散歩？私もなのよ…っていうのは嘘。本当はお勉強の時間なんだけどちょっと抜け出して来ちゃったの。

だってこんなにいいお天気なんですもの、お散歩しなきゃソンだわ。

ねぇ、小鳥さんせっかくだから少しお話をしない？

え？口下手だから私の話を聞くだけでいいって？

そう…そうね、じゃあ私の家族の話聞いてくれる？

＊

私にはね、６６人のお兄さまと5人のお姉さまがいるの。

ふふ、多いでしょう？そうね、お兄さまの中にはお会いしたことがない方もいるわ。

だって私が物心つく前には「王位争い」が始まってしまっていたのだもの。

会おうにも、もうお墓の下だったりしたら無理な話よね。

まぁでも、あまりお会いしたいとは思わないわ。

「王位争い」をしているお兄様たちと下手に”かかわりあい”を

もつと”きけん”なのよって、マリアンヌお姉さまたちがいっていたもの。

あっマリアンヌお姉さまはね、私の二番目のお姉さまよ。
他のお姉さまたちとちがって私をいじめないし、やさしいし、とても強くってすてきなお姉さま。
それにスタイルもよくって…いつか私もあーんな体になれるかしら？特にお胸とか…とっ、とにかく大好きなお姉さまのお一人よ！

それにそれに！何といってもあのミリアンお兄さまと双子なの！性格は全然違うのに顔がすごく似ていらして…え？ミリアンお兄さま？

ミリアンお兄さまは、お兄さまたちの中で一番一番いっちばーーーん大好きな方！
ふふ、みせてあげたいわミリアンお兄さまのこと。いつもね優しい顔をしていらして、金色の目がきらきらしてるの。

あなただって一度でもお会いしたらぜったいミリアンお兄さまのことが大好きになるんだから！

マリアンヌお姉さまには申し訳ないけど、お姉さま以上に素敵なのよ！
次の「めいおう」にはぜったいミリアンお兄さまがなるに違いないわ。
だってあの方以外には考えられないもの。そう思ってるのは私だけじゃないわ、あのレティお姉さまだってあつく語っていらしたから間違いなしよ。

他のお兄さま方なんて足元におよばな……あー、力だけならミリ

アンお兄さまにひけをとらない方もいるけど…あーぁ、どうして思い出しちゃったのかしら。

え？いえ、そのね…私の中では絶対にお会いしたくないお兄さまナンバーワンな方なんだけど。

ディムロス兄さまっていうんだけどね。

うん、なんていうかなぁ…一言で言えば”こわい方”。

面と向かってはお会いしたことがないんだけど、その姿を見るだけで息苦しくなるというか…前にレティお姉さまのとことに遊びに（？）いらしているのを遠くから見たことがあるのだけれどもう怖くて怖くて泣いてしまったわ。

マリアンヌお姉さまやレティお姉さまも「あれを見たら見つかる前に全力で逃げなさい」っていわれてるし。

そうそう、そのディムロス兄さまに一番めいわくをかけられているのがレティお姉さまなの。

マリアンヌお姉さまと同じぐらい大好きな、４番目のレティシアお姉さま。

「王位争い」を「くだらない」って一抜けしたしちゃったすごいお姉さまよ。

なにがすごいって？

だって、たくさんのお兄さまたちがころしあってでものぞんでいる「めいおう」のお嫁さんになれるチャンスをあっさりと捨てたのよ？

イジワルな他のお姉さま方はライバルが減ってよろこんでいたみ

たいだけど「愚かな妹姫」と鼻で笑ってたし、王座にとりいろうとするレティお姉さまの親族や、周りの方たちはすごくあわてたみたい。

でもね、私そんなレティお姉さまにすごくあこがれたの。

私もね、本当は「王位争い」なんてどうでもいいの。

「ださん」や「ぼうりゃく」でもない、ただ普通に遊んでくれる、優しくしてくれるレティお姉さま、マリアンヌお姉さま、ミリアンお兄さまたちといっしょにいれればいいなって、思ってたの。

でも「いやだ」なんていえなかった。だって正直あのころはよくわかっていなかったし、なによりも周りのおとなたちが怖かったから。

でもね、レティお姉さまが「一抜け」宣言をなされてこちらへ来たと聞いたとき、すごくすごく勇気をもらったの。

このままじゃいけない、私も動かなきゃダメなんだ、って思ったわ。だからレティお姉さまの元へきたのよ。

私をみてびっくりした顔をしてたけど、すぐに「好きにしなさい」っていって頭をなでてくれたの。

ね？素敵なお姉さまでしょ？

多分あのまま、あちらにいたら私もうしんじゃっていたかもしれないわ。

今の私があるのはレティお姉さまのおかげなのよ。

だからね、レティお姉さまには誰よりも幸せになって欲しいんだけど…色々と、ね？

やっぱりディムロス兄さまにちょっかいをかけられてるのがレテ

ィお姉さまの一番の不幸なのかしら。
もうっ、ミリアンお兄さまももっと積極的にうごいてくれればいいのに。
ちなみに「いまどき王子様ヅラした輩は流行らないのにほんっとミリアンってば嫌な奴ー」っていうのはマリアンヌお姉さまの言葉よ。

え？なんで私がそんなにヤキモキしてるかって？
だって見てればわかるわよ。レティお姉さまって本当こういうことにはおくてっていうかニブイってうか…

…あ、大変。ぬけだしちゃったのがバレちゃったみたい。
お屋敷のほうから道の声がするわ。もう、ウェイツったらすぐにバレちゃうんだから。

じゃあ、私もういくわね。
お話聞いてくれてありがとう、小鳥さん。お散歩楽しんでちょうだい。

あっ、そうだ！もうひとつだけ聞いてくれる？

いろいろあるけど、私、今とても幸せよ！
だからあまり心配しないでって、お母さまに伝えて頂戴ね。

ふふ、バレてないと思った？
私、いつまでも子供じゃないのよ。

幼姫のゆううつ（後書き）

子供なので話がすぐにかわります（笑

小鳥さんは娘思いのお母さんからの使い魔でした、てきなオチで。
アンジェラのお母さんは争いを好まない人です。レティシアの元へいく手伝いをしたのも母親。

憤怒と執着

―・・いけ好かない。

腹立たしさは治まりを知らず、苛立ちは”形”を成して身体から溢れ出ては、周囲に激しい音を立ててぶつかる。

俺の大事な妹姫(レティ)が、突如その行方をくらましたのは数年前のこと。

はじめはアレが”隠した”のかと勘繰っていた。

けれども、どれだけ探そうがこの地の何処からも彼女の匂いがしない。

ようやくその匂いにたどり着いたときは歓喜に身が震えたものだ。

きっかけは何番目だかの兄弟の一人がアレに手をだしてあっさり潰されたという話を聞いた時だ。

どうやらその兄弟(バカ)がアレに罠を仕掛けるため、その直前にレティに近づいたというではないか。

まさか彼女が奴の手元を離れてあちら側にいたとは思いもよらず（そんなことアレが許すハズがない、と思い込んでいた）すぐにあちら側へ網を伸ばせば、冥界(こちら)と人界(あちら)をつなぐ扉の一つのすぐ側に、彼女の”匂い”を見つけることができた。

久々の彼女の匂いに当てられ、逸る気持ちを止められる訳がない。

どうやら他の姉妹姫と暮らしているようだが、まぁそんなの問題

ない。早々に会いに行くことにした。

俺たちにとって数年など大した年月ではないが、”欲しい”と思った時に”会えない”この数年は実に”餓えた”日々だった気がする。

力の差に怯えているのに、心は折るまいと気丈に立ち向かってくる変わらないあの姿を再び目に出来たときはそれだけでイッてしまいそうだった。

その冷たく光る雪の白髪と、血管が透けて見えてしまう柔肌にあふれるぐらいの口づけをおとす。

愛しくて愛しくて愛しくて愛しすぎて――・・ああ、壊してしまいたくなる。

幾度となく繰り返してきた彼女との甘美な逢瀬(あそび)も、もう終わりにしていっそのこと俺の城に閉じ込め飽きることなく永遠に貪り尽くし続けてしまおうか。

彼女の細首を締めながらうっとりとそう考えた。

…いや、やはりもう少し遊ぼう。ただすぐ閉じ込めてしまうなんて品がない。

この娘(レディ)が足りなかったこの数年分の心の餓えを満たしてからでもいいんじゃないか？

あぁ、じゃあそうしよう。彼女のいろんな顔が見てみたい。

思い立ったら即行動が、俺の理念だ。即座に作り上げた迷宮の中に彼女を放り込む。

あぁ、やはり動く彼女(レディ)はいい。

いつも期待以上のことをやって見せては、俺を楽しませてくれる。
思い返せば、出会った当初もよくこうして亜空間に投げ入れては遊んでいたものだ。
そういえばこの娘に興味を持ち始めたのはいつごろだったろうか…そうそう、あいつのお気に入りだったと聞いたから少し遊んでやろうとしたんだったか。

あの頃から人形のような美しい顔をしていたが、アレが上辺だけで構うはずがない。だが、つまらぬ中身ならさっさと壊してしまおうと一人でいるところに手を伸ばした。
結果は――・・予想以上。

どうしようもない圧倒的な力の差を前にしても足掻こうとするその姿、その存在。

それからか、彼女自身に執着するようになったのは。
そして気付く…彼女も又、アレに心奪われているということを。

何故、その瞳に映るのは俺ではないのか。何故その手が求めるのは俺ではないのか。

どうにかして俺のことだけでその中身(こころ)を埋め尽くしてやろうとしても、あいつがいつも邪魔をする。

昔からあいつのことは嫌いだった。
いつも澄ました顔をして何を考えているかわかったものじゃない。

そのうち、俺のレティを独占しようとするあいつのことは「目障りな存在」から「殺し尽くしても飽き足らない目障りな奴」になっ

た。

だからレティが「お兄様」と口にした時、小さな声にもかかわらず聞こえたその音に、その不快な響きに俺の狂った中に残る僅かな理性は瓦解した。

わからないのなら教えてあげよう、レティシア。

俺の想いを、俺の愛を、俺の存在を。お前の中に俺しか存在しないように。

俺だけでお前を塗りつぶしてあげる。

だがそんな俺の純粋な想いすらも邪魔する輩たち。

あぁ！ああっ！！またしても貴様かミリアン！！

『レティシアはね、紳士然とした男が好きなんだよ』

いけ好かない顔で、強い殺気をその眼光に宿し、そう、奴は俺に囁いた。

あぁ！レティ！声高に叫んでお前に問いかけたいよ！

お前が想い慕っているこの男こそ、腹に一物抱え込んでいる食わせものなのだと、何故気づかない！

「あー、むしゃくしゃする」

思い返しただけでも腸が煮えくりかえる。

手当り次第に辺りのモノをぶち壊してこの怒りは治まりそうにも

ない。

『ひひっ、荒れてますなぁ』

ほんの半刻前にはここに石造りの小城があった。

しかし今やその面影は一切見られない。元の形など想像できないほど粉砕された瓦礫が所狭しと横たわるのみだ。

その上をひょいひょいと歩み寄るのは猿と鳥を混ぜ込んだ奇怪な魂鬼(コンキ)。

「ほんっと腹が立つ」

崩れた瓦礫の一つに手を突っ込むと、埋もれていたモノを引きずり出す。

それはここにあった城の持ち主だったモノ。

手足はちぎれ、その四肢からおびただしい血を溢れさせても尚、まだかろうじて息はある。

その頭を鷲掴みにして掲げ上げれば苦悶に満ち満ちた顔が見えた。

「ぁ…ぁあ」

舌は意味をなさず、砕けた口から漏れるのは微かな音のみ。

『おや、まだいきていやがる』

かわいそうになぁ、と魂鬼が笑う。

「これっぽっちじゃ憂さ晴らしにもなりもしない」

『けけっ、じゃあ別のおもちゃでも探しにいきますかぃ？旦那』

「そうだな」

じゃあもう用はない、と手に力をこめればあっという間にそれは弾ける。

血潮にまみれた手を振り払いながらディムロスはふらふらと瓦礫の上を歩く。

―・・紳士然とした男が

だがふと耳によみがえる声に、その歩をピタリと止めた。

「…おい、黄練（ファンレン）。俺って”紳士”っぽくないのか？」

『はぁ？突然何いってやがるんですかぃ？』

「いいから答えろ」と促せば魂鬼は、うぅむと首をかしげて考えた。

『まぁまず”紳士”ってーのは、そんな血みどろじゃないことは確かでしょうなぁ』

そうか。そう言われてみれば、アイツはいつも汚れ一つついてないすかした格好だった気がする。

『っていうか何すかイキナリ。大体”紳士”なんて糞いけすかねぇイメージしかねぇですぜ―・・って旦那っどこ行くんでぇ！？』

「着替える」

『はぁ？ちょっちょっと待ってくだせぇよ！』

別に奴の真似をするわけじゃない。
少しあの娘（レティ）に対しての手法（アプローチ）を変えるだけだ。

きっとレティも気づく筈。あいつよりも俺の方がどんなにいい男かってことを。

まずはこの返り血だらけの服を着替えて――そうだ、どういう殺り方なら汚れずにすむか考えなきゃな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2691q/

NoLifePrincess

2011年10月12日22時34分発行